NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ−200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　8

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15621709

ダイの大冒険, ヒュンケル, アバン, バルトス, 子ヒュン

アバン一行、いよいよホルキア大陸へ。バルトスの遺言の意味を見つける旅。初めて付けたこの人のタグに作者緊張。

2021.7.17 ダイの大冒険webオンリー「KAN-DO!Fes. ~ 即売会からは逃げられない...！」合わせ。https://kan-do8.com/allevent/kan-do-fes010/・・・にしたら、新アニメ「闇の師弟対決」にも合ってしまった（汗）。内容含め。
長くなる予感がしたので、半分に切ったはずが、いつの間にやら最長不倒・・・。どうりで終わらないわけだ（泣）。長くてすみません。ようやく終わりが見えてきました。

Table of Contents

あるべき未来に進むために　8

第８章　啓発

　ヒュンケルは、船から下りると、よろめいた身体を立て直した。もう６日も船に乗っていたのだ、体が波に合わせたバランスをとっており、大地に足を下ろすと逆にふらつくありさまだった。
　それを見て、アバンが苦笑した。もちろん、バケルは地面に足をつかないので、船旅の影響は一切なかった。
　ひとりだけ波の感覚が抜けきらないヒュンケルは、むっとした様子で、姿勢を直した。
　ヒュンケルはアバンに尋ねた。
「ここが、パプニカ、ですか？」
「ええ。」
　アバンはうなずいた。
　「ここはパプニカの西の玄関口です。すぐそばに、都が見えますよ。ほら、あそこに、尖塔が見えるでしょう？あれはパプニカの大聖堂ですよ。」
「ふーん・・・。」
　ヒュンケルは、あまり興味のなさそうな顔で答えた。
　アバンは、再び苦笑した。
「今回は、都は寄らずに、東へ進むつもりです。今日はこの街に泊まりますけどね。宿に入ったら、ちょっと地図を見てみましょうか。」
　アバンは、そう言いながら、桟橋から街中へと足を進めた。

　アバンは、宿に入り、一息つくと、部屋の中で地図を広げた。
　アバンは、何種類かの地図を持っており、街から街へと移動するたびに、それらの地図を広げてヒュンケルに見せていた。しかも、アバンは、まずヒュンケルに世界地図を見せ、現在どのあたりにいるのかを示したうえで、より狭い地域の地図を見せる。おかげで、ヒュンケルも、世界地図は大体頭に入っており、主要都市がどのあ

たりにあるのかもわかるようになっていた。
　この日も、アバンは、まず世界地図をヒュンケルの前に広げた。アバンは、世界地図に描かれた、向かって左側の大陸を指で示した。
「ここが、ラインリバー大陸で、ネイル村は、このあたりですね。」
　アバンは、地図の上で指を動かしながら、言葉をつづけた。
「ネイル村から東に移動して、ここの港町に出て、船に乗って・・・いま、私たちがいるのが、右側のホルキア大陸です。ちょうどこの街は、西のこのあたりですね。」
　ヒュンケルは、アバンの指を目で追いながら、じっと師の言葉に耳を傾けていた。
　ヒュンケルは、地図を見るのは好きだった。
　これまでの旅路が思い出され、各地の風景がよみがえる。それが地図の上で形になっていき、思考がまとまる。
　そのすっきりとした感覚が好きだった。
　ヒュンケルは、地図に視線を落としながら、アバンに尋ねた。
「ここからどっちに行くんですか？」
　アバンは、ホルキア大陸の縁をなぞりながら、指を右側に滑らした。
「こっちの、東に行こうと思っているんです。」
「何か、目的があるんですか？」
「ええ。遺跡に行こうと思って。」
「遺跡？」
　ヒュンケルは、アバンに尋ねた。アバンはうなずいた。
「このホルキア大陸は、古い遺跡が多く残っているんですよ。以前、ロカたちと旅をしていたときも、ホルキア大陸の遺跡には立ち寄りましたね。」
　アバンは、その言葉にわずかに懐かしそうな色を添えてヒュンケルに答えた。ヒュンケルはさらにアバンに尋ねた。
「今回もそこに行くんですか？」
「いえ・・・残念ながら、ロカたちといった遺跡は壊れてしまいましてね。今回私が目指そうと思っているのは、別の遺跡です。」

「何の遺跡なんですか？」
「それは行ってのお楽しみですよ。」
　アバンは、片目をつぶって答えた。
　ヒュンケルは、このアバンの人を食ったような答え方が苦手だった。ヒュンケルは、露骨に不機嫌そうな顔をした。
　すると、彼らの上でふわふわと漂っていたバケルがおりてきた。ヒュンケルの顔の前に逆さに頭を出し、彼の額をぺちぺちと手で叩いた。
「ヒュン、カオ、ヘン。」
「うるさい。」
　ヒュンケルは、バケルを手で払った。

　ホルキア大陸に船で降り立ってからたっぷり日程をかけて、ヒュンケルはアバンとともに、海沿いの街道を東へと移動した。その間、３つの街に立ち寄り、目指す遺跡のある街にたどり着いた時には、港町に降りた日から数えて、１０日は経っていた。
　アバンは、その街の宿で一室を借り、しばらくここに滞在することを決めたようだった。
　この街に着いたその日は、彼らは温泉に浸かり、ゆったりと旅の疲れを癒した。
　この街には、源泉から湯を引いた公衆浴場があった。初めて見るその施設に、ヒュンケルは戸惑っていたが、アバンは、ホルキア大陸には温泉が多いんですよ、疲れが取れますよ、などと話し、ヒュンケルを公衆浴場で洗ってやったのだった。

　その翌日、ヒュンケルは、アバンに連れられて、その遺跡とやらを見に行くことにした。ヒュンケルの肩の上には、いつもどおり、バケルがふわふわと浮いていた。
　道すがら、アバンがこの街の歴史について解説をしてくれた。
「この街にある遺跡は、神殿を中心とした住居跡です。およそ、１２００年前から８００年前にかけてのものと推定されています。」
　ヒュンケルは、素朴な疑問をアバンに投げかけた。
「何で、その頃のものだってわかるんですか？」

すると、アバンは、簡潔に彼の疑問に答えてくれた。
「地層ですよ。」
「地層？」
「そう。
　地面には、その時々の砂や土、枯れ葉などの堆積物が順次積もっていき、層をなします。それが地層です。その堆積物の積もり方で、それぞれの層がいつ頃のものなのか、おおよその年代がわかります。
　この遺跡も同じです。
　この街の神殿や住居跡は、土の中に埋もれていたのです。それが、５０年ほど前に発見され、順次、発掘作業が行われました。そして、神殿や住居跡が埋まっていた地層の深さからおおよその年代が分かったわけなんですよ。」
　そうしている間に、彼らは、街の奥にある遺跡の入口へとたどり着いた。
　簡単な柵と扉で、現在の街とは区別されている。
　アバンが、係員に金を払い、扉を開けてもらうと、そこには、背後の街とは全く異なる風景が広がっていた。
　扉のすぐ内側は、なだらかな坂になっていて、街よりも低い場所まで降りられるようになっていた。
　そうして坂を下りて行った先には、整然と、石畳で舗装された道が敷かれており、さらにその向こうには、石やレンガで築かれた、古い壁や柱が、いくつもそびえたっていた。
　さらに、石畳の両脇には、乾いたベージュの大地に大きな穴がいくつも掘られていた。穴の底には、無数の規則正しい長方形が描かれている。そして、それぞれ、なにやら文字が書かれた木の板が置かれていた。
　穴の中をよく見ると、古びた石の床や壁、柱が見て取れた。
　その床に、いくつもの壊れた土器や、鉄器のかけらが整然と並べられ、やはり文字の書かれた木の板が置かれている。年代ごと、種類ごとに分類されているようであった。
　アバンは、遺跡の中をヒュンケル、バケルとともに歩きながら、言葉をつづけた。

「この遺跡は、無傷に近い状態で残っていました。戦乱で廃墟となった街では、こんなきれいな状態では残りません。
　ほら、床や壁に焼けた跡がないでしょう？だから、少なくとも、放棄されたときには、火災がなかったんですよ。
　壁に穴も開いてないですし、崩れてもいないから、攻め込まれたわけでもない。
　それに、あっちを見てください。」
　アバンは、別の穴の隅を指さした。見ると、何やら土の塊のようなものがある。その隣には、ひびの入った瓶のようなものが置かれていた。
「あれは、食べ物の化石です。昔からこの地方で食べられていた果物です。ほら、昨日見た市場でも売られていたでしょう？固い殻を割って、中の実を取り出して食べるんです。殻が固いので、そのまま残ったのでしょうね。
　その隣の瓶は、ワインが入っていたようですね。説明書きにそうあります。
　食器も残っていますね。
　あっちの広い穴は、浴場跡です。大きさから言って、公衆浴場だったのでしょう。湯を引いた穴や溝、石を積んで壁を作った浴槽も残っていますね。」
「・・・なんだか、いまにもこの街の人が戻ってきそうですね・・・。」
　ヒュンケルは、ぽつりと感想を漏らした。
　ある日突然、この街の時間が止まった。
　そんな印象を受けた。
　アバンは、ヒュンケルに微笑みかけた。
「そうですね。今のように、残っている現象から、何が起こったのかを読み解くのはとても大事です。
　ヒュンケル、あなたはこの街は、何故、このまま時を止めてしまったのだと思いますか？」
「えっ・・・。」
　アバンに急に尋ねられ、ヒュンケルは戸惑った。
　確かに、アバンの言うとおり、戦争で滅びた街には見えなかった

が、この街から人が消えた理由は想像ができなかった。
「・・・わかりません。」
　ヒュンケルは素直に答えた。アバンは、穏やかに微笑んだ。
「そうですよね。あなたはまだこの街を初めて見たばかりです。わからなくて当たり前です。ただ、そういう疑問を持ってみると、見えてくるものがあると思いますよ。」
　そう言いながら、アバンは歩みを進めた。ヒュンケルも後に続く。

　少し歩くと、ひときわ大きな柱と壁が見えてきた。アバンは、その柱を見上げてヒュンケルに示した。
「さ、神殿跡が見えてきました。入ってみましょうか。」
　そうして、アバンは、この遺跡の中心にある神殿跡に足を運んだ。
　神殿跡は、まず、大きな２本の柱を入り口としていた。
　そして、その先には、石畳が広く敷かれていた。
　天井は、もうなかった。天井の崩れた跡なのだろうか、壁際に、いくつもの石の板や木片が積まれていた。
　石畳には、埃だけではなく、灰のようなものが堆積していたのだろう、足元の石と石の隙間には、びっしりと細かい灰が詰まっていた。
　壁も、ところどころ崩れていたが、奥に進むにつれ、しっかりとした遺構が目に付くようになった。
　ひときわ目を引いたのが、石で整備された床の上に置かれた、大きな石だった。
　だがそれは単なる天然石ではなく、しっかりと磨きこまれ、きれいな長方形を作っている。そして、その上面には、いくつものくぼみがあった。そのくぼみの周りには、焦げたような煤の後もついていた。
「燭台跡でしょうね。」
　アバンが、手短に解説する。
　その石の奥は、すぐに壁になっていたが、その壁はほかの箇所とは大きく異なっていた。

人の形をした肖像が描かれているが、その背には、鳥のような、大きな翼の絵が描かれている。
鮮やかな色彩が今も残る、フレスコ画だ。
赤色の塗料はやや退色して褐色に変化していたが、青色は、今もなお、鮮明にその色彩を訴えかけていた。
互いに向き合って描かれている、２体の肖像。その背には、いずれにも大きな白い翼。
だが、それぞれの肖像の肌は、異なる色で塗られていた。
１対と言っていい、向き合い、互いに手を差し伸べているその肖像の下には、異形の生物が描かれ、三方からの手が一つに重なろうとしている様子が描かれていた。
そして、そのフレスコ画の下には、２種類の文字が書かれていた。
「ここは、祭壇だったのでしょうね。」
アバンは、軽く説明をすると、壁の一点を示し、ヒュンケルに尋ねた。
「ヒュンケル、これがなんだかわかりますか？」
「・・・文字？」
「読めますか？」
「・・・ええ・・・。」
ヒュンケルはうなずいた。一通り目を通す。
文字の意味を理解したヒュンケルは、アバンに答えた。
「これ、同じ内容が、２回書かれていますね。」
「ええ。」
「違う文字で。」
ヒュンケルは、その言葉を読み上げた。
「この街に住むすべての民よ、嘆くことなかれ。神々はあなたがたの祈りの声に応え、必ずあなたがたに恵みを施される。目をさまし、感謝のうちに、祈りを捧げよ。」
それは、祈りの言葉であった。
アバンは、ヒュンケルの声を聴きながら、答えた。
「この言葉を読み上げながら、ここで祈りを捧げた、ということなのでしょうね。」

ヒュンケルは、壁に刻まれた文字と、その上に描かれたフレスコ画を見上げながらアバンに尋ねた。
「神々・・・複数になっていますね。この絵が、その神々なのでしょうか。」
　アバンはうなずいた。そして、再度、ヒュンケルに尋ねた。
「複数の神々、１対の翼をもつ肖像、三方から伸びる手、『この街に住むすべての民』という表現・・・。
　ヒュンケル、ここに、この２種類の文字が書かれていることの意味が分かりますか？」
　ヒュンケルは、アバンの問いの意図をつかみかね、尋ね返した。
「・・・どういうことですか？」
「あなたは、この２種類の文字を両方とも読むことができる。でも、あなたが私との旅の中で見てきたのは、こっちの、下の文字だけだったでしょう？」
「はい。」
「それはね、今この地上で使われている文字は、この下の文字だけだからです。」
「・・・え？」
「この上に書かれた文字は、この遺跡が街だったころは、この街で普通に使われていたようですね。だから、ここに２種類の文字がある。ただ、今の時代、この上の文字を読めるのは、古代史の研究者か、あるいは魔法や術法の研究者だけです。
　・・・なぜなら、この文字は、魔族の文字だからです。」
　アバンの言葉に、ヒュンケルは驚いてアバンを見上げた。
「えっ・・・だって、先生、この上の文字の辞書、持っていたじゃないですか。」
　アバンは、壁画に目をやりながら答えた。
「あれは、私の先生からいただいたものだと、以前、あなたに話したことがありましたね。」
「はい。」
「私の先生は、魔族でした。」
　その言葉に、ヒュンケルは息をのんだ。
　アバンは淡々と続けた。

「私は、その方から、魔族や魔界のこと、彼らの文字まで様々なことを教わりました。あの辞書は、あの方からのたったひとつの餞別です。」
　アバンは、その声に、わずかに寂しさを漂わせた。
　しかし、すぐに学者らしい、詳細かつ分析的な言い方に口調を変えた。
「古来より、人数は少ないですが、魔界に行った人間もおり、その方々の残した紀行文がいくつか残されています。また、魔族と交流を持った人の研究書も、残されています。
　そこからすれば、この神殿の壁にある、この上の文字、これは、魔界で魔族が使う文字、下の文字は、地上で人間が使う文字だということは、明らかです。」
　アバンは、フレスコ画を見上げながら問いをつづけた。
「先ほど言ったとおり、この神殿の壁に書かれたこの言葉、これは神に捧げる祈りです。これを見ながら、この街の人々は、ここで祈りをささげたのでしょう。
　ヒュンケル、この意味が分かりますか？神に捧げる言葉、同じ内容の言葉が、ここでは２種類の文字で書かれている。そして、神々の肖像が、一対のものとして描かれている。」
　アバンは、ヒュンケルに答えを促した。
　アバンは決して答えを教えない。常に、ヒュンケルに考えさせ、彼が、彼なりの答えを導くのを待っていた。
　ヒュンケルは、しばらく考え込むと、ある結論にたどり着いた。だが、なかなかそれを口に出せなかった。彼の常識の範囲外だったからだ。
　アバンは、じっとヒュンケルを見つめている。その視線に耐えかねて、ヒュンケルは、たどり着いた答えをぽつりとつぶやいた。
「・・・ここでは、人間と魔族が、同じ神を信じていた・・・。」
　アバンは、うなずいた。
「そうです。
　同じ神を信じ、同じ神に、同じ場所で祈りをささげる。
　ここに描かれた一対の神々の肖像、その肌の色は、一方は白く、一方は青い。人間と魔族の神・・・いえ、神の遣いでしょうか。そ

れが向かい合い、互いに手を伸ばしているさまが描かれている。そして、さらにその下に描かれている異形の生物からも手が伸び、三者の手が重なろうとしている。
　この街は、魔族と人間、そしてモンスターまでもが共に暮らしていた街なのですよ。」
　アバンの語る内容は、確かにこの神殿の情景に合致していた。彼の言うとおりなのだろう。だが、アバンの説明するこの遺跡の中に眠る歴史に、ヒュンケルは強い違和感を抱いていた。
　ヒュンケルは、戸惑いを隠せないまま、アバンに尋ねた。
「・・・先生、この下の文字、これは、地上で人間しか使わないものなのですか。」
「そうですよ。」
　アバンは、ヒュンケルの戸惑いに気付いているだろうに、それを癒そうともせず、はっきりと事実を口にした。
　アバンは、ヒュンケルに尋ねた。
「あなたは、私に初めて会った時から、この下の種類の文字もある程度読めていましたね。私たちが地上で使う文字は、魔族の文字に比べて複雑ですが、あなたは、簡単な文字なら地上の文字も読めていた。
　・・・あなたにこの文字を教えてくれた人がいたのですね。」
　それが誰か、ということは、アバンはあえて尋ねなかった。
　ヒュンケルは、うつむいたまま顔を上げなかった。
　アバンは、言葉をつづけた。
「ヒュンケル、あなたは、この地上の世界地図も見たことがあったんですね。
　あなたは覚えていないかもしれませんが、私は、あなたと初めて会った直後に、あなたをカールに連れて行きました。そのとき、私と初めてカールで話をしたとき、あなたは『カール』という国を知っていた。私が旅の中で何度もあなたに世界地図を見せたときも、すぐに各国の配置も名前も理解した。
　あなたに、この地上の世界地図を見せてくれた人が、いたんですね。」
　ヒュンケルは、どきりとした。

しかし、またもやアバンは、それが誰か、ということには踏み込まなかった。
　ヒュンケルに、地上の文字を教え、世界地図を見せてくれた人は、一人しかいない。
　アバンは、何を言おうとしているのか。何を、知っているのか。
　黙ったままのヒュンケルに、アバンは、外を指し示した。
「外にも、いろいろあるようです。見てみましょうか。
　バケルも、いらっしゃい。」

　アバンは、オレンジ色のアンデッドモンスターを肩に乗せ、神殿跡地から外に足を進めた。
　アバンは、振り返らなかったが、ヒュンケルが彼の後をついてきていることを確信しているようであった。
　アバンは、歩きながら、明るい声を出した。
「昨日の温泉はよかったですね。今日もたくさん歩いてますから、汗をかいたでしょう。今晩もまた、浴場、行きましょうか。」
「ヤッター！」
　バケルが機嫌のよい声を上げ、くるりと宙返りをした。
　だが、ヒュンケルは、押し黙ったまま、アバンの後をついて歩いていた。普段であれば、アバンは、ヒュンケルにも話を振って、声をかけるが、この時は、あえて何もしなかった。
　ヒュンケルは、アバンの後をついて、なだらかな坂道を上がっていった。神殿の奥手には、草の生す大地が道をなし、次第に大きく広がっていく。その先には、小高い丘があった。
　しばらく歩くと、彼らは丘の上に降り立った。
　そこからは、街の外の風景がよく見える。ここは遺跡の敷地の外にあり、柵はもうなかった。だが、丘の上には、ところどころ、穴が掘られた跡があり、文字の書かれた板が、杭に刺さって立てられていた。
　丘の前には、大きな山が迫っており、その場に立つと、目の前の山の偉大さがよく見て取れた。
　アバンは、小さな冊子を取り出すと、そこに描かれた地図と、この場を照らし合わせているのか、交互に、地面の穴と看板、それに

冊子を見比べていた。
　しばらくすると、アバンは、得心したようにうなずいた。
「やっぱり、ここですね。」
　アバンは、ヒュンケルに振り返った。
「ヒュンケル、あそこに説明書きがあります。読んでみましょうか。」
　そう言って、先ほどから黙ったままのヒュンケルを、看板の前に連れて行った。
　アバンは、杭に刺さって建てられた板に書かれた文字を読むと、ヒュンケルに説明をした。
「どうやら、ここが、何人もの遺体が発見された場所のようですね。」
　不穏な言葉に、ヒュンケルの肩がぴくりと動いた。ちらりとアバンを見上げた。
　アバンは、ヒュンケルの方を見ずに、説明をつづけた。
「ここで、何人もの骨が発見されたと書かれています。それと、武器や祭具も発見された、とありますね。」
　ヒュンケルは、アバンを見ずに答えた。
「・・・ここで、ですか？でも、いままでの街中の遺跡では、骨が発見されたってありませんでしたよね。」
　アバンは、満足げにうなずいた。
「グッドです。いいところに気付きましたね、ヒュンケル。そのとおりなんですよ。」
　そして、そのまま、ヒュンケルに説明を始めた。
「この街の規模ですと、少なく見ても、様々な種族取り混ぜて、ざっと、３０００人は生活していたはずです。それなのに、それほどの骨は発見されていない。あるのは、この丘ばかりで、町中からの発見はないのです。もちろん、風化や損傷で、現在まで残っていない骨が大半でしょうが、それにしても少なすぎます。
　さて、ヒュンケル、あなたはこれをどう理解しますか？」
　またアバンからの問いがきた。ヒュンケルは少し考えて、師に答えた。
「・・・街の人は、その大半が逃げたってことですか？」

ヒュンケルの答えに、アバンは、大きく頷いた。
「そうでしょうね。」
「じゃあ、どうしてここだけ。」
　アバンは、ヒュンケルの問いに直接は答えず、丘の上につけられたいくつもの印を指さした。
「あそこに、１人、こっちには、３人。向こうの穴のところでは、５人分まとめて。この丘のあちこちで、骨は発見されています。どの骨にも、大きな損傷はなかったようですね。そして、その骨を調べてみると、ここで亡くなったのは、人間と、魔族、モンスターがあったそうです。」
　そうして、アバンは、今度は正面の山を指さした。
　丘の目の前には、地表からも標高の高さがうかがえる巨大な山が、その山肌をせり出すように示して、そびえたっていた。
「ヒュンケル、あそこに山が見えるでしょう？あの山は、いまは活動を休止していますが、かつては頻繁に噴煙を上げていたそうですよ。最後に噴火したのは、８００年前です。」
　その数字に聞き覚えがあり、ヒュンケルはアバンに聞き返した。
「・・・８００年前？」
　アバンは、うなずいた。
「そう、この街が時間を止めた頃ですね。」
　ヒュンケルは、何かに気付いたように、はっと表情を変えた。その様子に気付いたアバンは、満足そうに笑みを浮かべた。
「温泉のある所には、火山があります。この街の遺跡にも、浴場跡はありましたし、私たちも昨日、温泉に入ったでしょう？
　あの山は、火山なんですよ。ただ、もう長いこと噴火をしていないようですけどね。」
　そうして、アバンは、活動を休止した山を見上げた。
「あの山が最後に噴火しようとした時、この街の人々は、それに気づいたのでしょう。街の大半の人を外に逃がした。
　けれども、全員は逃げなかった。この場に残った人がいたのです。それが、この丘です。」
　ヒュンケルは、師に尋ねた。
「・・・どうして。」

「山の怒りを鎮めるためですよ。」
「山の怒り？」
　ヒュンケルの疑問に、アバンはうなずいた。
「昔の人々は、火山の噴火を自然現象とはとらえずに、神の怒りと考えていました。そのため、あの山に宿る神の怒りを鎮めるために、この丘に、一部の人が残ったのでしょう。そして、必死に祈った。そうすれば、噴火を抑えられると信じて。だから、この場からは、骨だけではなく、祭具や武器も発見されたのでしょうね。」
　だが、アバンの説明にヒュンケルは納得できなかった。人の力で噴火が止められるはずがない。逃げるしかないのに。
「・・・でも、そんなことしたって・・・。」
　アバンは、ヒュンケルに疑問を肯定し、うなずいた。
「ええ、私たちの知識では、無意味です。
　でも彼らにとっては、そうではなかった。何とかしてこの街を守ろうとして、責任を負う立場の人々がここに残り、神に祈りをささげた。その中には、人間もあれば、魔族も、モンスターもいた。
　しかし、結局、噴火は抑えられず、あの山は噴煙を上げ、この街は、火砕流の下に沈んだ。この丘も、ここにとどまった人もすべて飲み込んで。
　街を出た人々は、散り散りになり、この街は時間を止めた。」
　アバンの言葉に、ヒュンケルは、強い感傷を覚えた。この場にとどまった人々は、無為に命を捨てたように感じられたからだ。
　しかし、アバンは、穏やかな声で言葉を紡いだ。
「でもね、この街を守ろうとして、種族を超えて、手を取り合った歴史があったというのは、私にとっては大きな希望です。」
「・・・希望？」
　ヒュンケルが聞き返した。
　アバンは、その問いかけには答えず、変わってまったく別の出来事口にした。
「ヒュンケル。はっきり言ったことはありませんでしたが、あなたは、もう分かっているでしょう。
　私は、魔王ハドラーを倒しました。」
　アバンの言葉に、ヒュンケルはどきりとした。冷や水を浴びせか

けられたような感覚に陥り、背筋に冷たい汗が流れる。先ほど感じた疑問が、再び頭を持ち上げた。
　アバンは、何を語ろうとしているのか。
　・・・何を知っているのか。
　ヒュンケルの戸惑いに気付いていないのか、アバンは言葉をつづけた。
「ハドラー・・・彼は人間を支配しようとしていました。私たちは、生きるために彼とは戦うしかなかった。
　でもね、さっきも言ったように、私の先生は魔族です。
　それに、私が子どものころは、モンスターたちとも触れ合っていました。
　それなのに、ハドラーが地上の支配の乗り出したことや、私が彼らと戦ったことで、私たち人間は、魔族やモンスターと大きく分断されてしまった。
　その結果が、今のこの世の中です。
　ただ、いまの世界の在り方は、本来の在り方ではないはずです。
　それを示しているのが、この遺跡であり、そして・・・。
　あなたたちです。」
　アバンは、ヒュンケルに視線を向けなかった。だが、その言葉は、まぎれもなく、ヒュンケルに向けられていた。
　アバンは、まっすぐに視線を上げていた。かつて、神の山と恐れられ、膨大な炎の嵐をもってこの街を飲み込んだ大いなる峰。いまはただ、その脅威を感じさせることもなく、静かな眠りについている。
　やはり、この山は、神の住み給う霊峰なのではなかろうか。そう感じさせる厳かな佇まいがそこにはあった。
　アバンは、神に捧げる誓いの言葉であるかのように、はっきりと、しかし、静かに言葉を紡いだ。
「この地上に生きるのは、私たち人間ばかりではない。
　人間と魔族と、モンスターが共に生きていく道がある。
　それこそが、あるべき未来だと、私は信じています。」
　迷いのない言葉だった。
　アバンは、視線を下げると、まず、自分の横に浮いていたバケル

を見つめ、にっこりと微笑んだ。そして、そこから視線を落とし、ヒュンケルを見つめた。穏やかな、そして、慈しむような微笑みだった。
　アバンは、つぶやいた。
「あなたたちに出会えてよかった。」
　アバンの視線を受け止めきれず、ヒュンケルは顔をそむけた。
　初めて触れる、アバンの思想に圧倒された。
　ヒュンケルは、アバンがハドラーを倒したことは、初めから知っていた。そしてそのために、多くの魔族やモンスターの命が失われたことも知っていた。
　その失われた命の中に、誰よりも大事なヒュンケルの父がいたのだ。
　今この世界の平和は、彼らの犠牲の上に成り立っているはずだった。それは、人間だけが、享受している安寧だった。
　ヒュンケルは、顔を背けたまま、アバンに問いかけた。
「・・・先生。」
「はい。」
「先生は、ハドラーを倒したことを後悔しているのですか？」
　すると、予想以上にはっきりとした声で、その答えは返された。
「いいえ。後悔していません。」
　その答えに、ヒュンケルは、腹が立った。
　自分で魔族やモンスターの世界を壊しておきながら何を言っているのかと怒りがこみ上げ、ヒュンケルは頬を紅潮させた。
「だったら、どうして・・・！
　もういいじゃないですか、人間だけが平和に暮らしていけば。そうするために、あなたは魔王を倒したのでしょう！？」
　アバンは、じっとヒュンケルを見つめた。
　この心の奥底まで見通すようなアバンの目が、ヒュンケルは苦手だった。ヒュンケルの過去も、彼の抱える強い負の感情も、何もかも知られているように感じられた。
　アバンは、静かに語った。
「私は、ハドラーと戦った時、彼を倒すしかないと思いました。
　でも、ハドラーにも、彼に付き従っていた大勢の部下や仲間がい

ました。私も、ハドラーも、お互いに、仲間や種族の命を背負って戦っていたんです。
　だから、私がハドラーを倒したその陰に、多くの魔族やモンスターの犠牲があったことを、私は忘れてはいけないんです。」
　アバンは、言葉をつづけた。それは、かつて、彼が仕えた王女に語った言葉と同じものであった。
「ヒュンケル、たとえ、私のやったことは、私を支持してくれた人たちから見たら正義ではあったかもしれませんが、ハドラーが背負っていた命から見たら、私は悪であり、仇であったことでしょう。
　万人にとっての正義などあり得ない。
　９９人が正義だと信じたことでも、たった１人にとっては悪であることだって、あるのです。
　それを忘れてしまったら、私が心に掲げてきた信条は、正義ではなくなってしまうのです。」
　そして、アバンは、ヒュンケルの過去を見透かしたかのような言葉を口にした。
「あなたの思っているとおりです。ヒュンケル。
　私は、かつて一度、この手でこの世界の秩序を壊しました。魔王を倒すという手段をもって。あのときはそれが必要でした。少なくとも、私はそう信じていた。
　ただ、そこにとどまってはいけないと私は思っています。
　もう一度、この世界に新たな秩序を取り戻したい。
　そのための手掛かりは、この遺跡に、そして、あなた方にあるのだと、私は思っています。」
　アバンは、まっすぐにヒュンケルを見つめていた。
　ヒュンケルは息をのんだ。そして、彼は確信をした。
　アバンは、ヒュンケルがただの子どもではないと知っている。ただ さらわれて地底魔城にあったのではないことをわかっている。
　ヒュンケルは、そのまま動けず、ただアバンを見返すしかなかった。普段は間抜けで、胡散臭い印象しかないこの男に圧倒されていた。
　アバンは、しばらくの間、ヒュンケルを見つめていたが、やが

て、いつも通りの柔和な笑みをその面に浮かべた。
「少し、難しすぎましたね。戻りましょうか。」
　そして、アバンは、傍らのアンデッドモンスターを見上げた。
「温泉、でしたよね、バケル。」
「ヤッター！」
　バケルが手をたたいて喜んだ。

　その夜は、久しぶりに父の夢を見た。

　地底魔城にあった頃、父が不在の時には、ヒュンケルの世話は、ほかのモンスターたちが担ってくれていた。
　この日も、父であるバルトスは戦場か、あるいは偵察に出ており、ヒュンケルは、父の不在の中、いつもどおり、オークの背中に乗って遊んでいた。
　魔王軍最強の騎士の称号を持つバルトスの息子という立場にあったため、ヒュンケルに対しては、魔王軍の誰もが丁寧に接し、また、かわいがってくれてもいた。
　それは、バルトスに対する敬意もさながら、ヒュンケル自身の愛嬌のためもあったのだろう。その頃のヒュンケルは、屈託がなく、よく笑う子だった。
　この日も、大きな体のオークが、四つん這いになって、その背にヒュンケルを乗せて遊ばせていた。
　床には、さっきまで遊んでいた積木がいくつも転がっていた。
　ヒュンケルは、オークの背に揺られ、歓声を上げて喜んでいたが、不意に、バランスを崩し、その背から落ちそうになった。
　すると、その様子を近くで見ていた一つ目のギガンテスが、慌ててヒュンケルを受け止めた。
　ギガンテスは、一つしかない目を細くして、少し怖そうな表情を作ると、ヒュンケルをたしなめた。
「そんな乗り方したら危ないですよ、ぼっちゃん。」
　ヒュンケルは、笑顔でギガンテスに答えた。
「ありがとう、ギガンテス。」
　そして、その大きな肩に飛びつくと、ヒュンケルはギガンテスに

ねだった。
「ねえ、肩車して。」
「しょうがないですね・・・。落ちないでくださいよ。」
　ギガンテスは苦笑しながら、ヒュンケルを肩に乗せた。
「すごーい！高い！」
　ギガンテスは、一つ目を上に向け、ヒュンケルの様子を感じ取ると、その強面を崩して破顔した。
　すると、廊下から、コツコツと高い足音が響いた。
　足音はだんだん近づいてきていたが、肩車に夢中のヒュンケルは気づかなかった。不意に、ヒュンケルは背後から声をかけられた。
「楽しそうだな、ヒュンケル。」
　ヒュンケルは、視線を巡らし、声の主を見つけると、一層笑顔を浮かべた。
「父さん！おかえりなさい！」
　地獄の騎士バルトスが穏やかな眼差しを息子に向けていた。
　ギガンテスは、ヒュンケルを肩から降ろした。
　ヒュンケルはバルトスに駆け寄った。バルトスも、息子に合わせ、背をかがめた。すると、ヒュンケルは、バルトスの首に抱き着いた。
「早かったね！待ってたんだ！！」
　バルトスは、骨の手をヒュンケルの髪に乗せ、ゆっくりと、優しく、その小さな頭を撫でた。穴が開いているだけのはずの眼窩が、穏やかに細められた。
「そうか、そうか。いい子にしてたか？」
　ヒュンケルは、力いっぱい頷いた。
「うん！あのねえ、オークにも乗せてもらったんだよ。」
　懸命に自分に話しかける幼い息子に、バルトスは穏やかに微笑んだ。ヒュンケルの言葉に、何度もうなずいた。
　ヒュンケルは、オークとギガンテスに振り返ると、礼を述べた。
「ギガンテス、オーク、ありがとう。」
　二体の大柄なモンスターは、口々に謙遜した。
「いえいえ、お安い御用ですよ、ぼっちゃん。」
「また乗せてあげますよ。」

バルトスが戻ってきたため、オークとギガンテスは、その部屋から出て行った。
　二頭のモンスターは、部屋を出るときに、ちらりとバルトスを見て、頭を下げた。

　廊下に出た、オークとギガンテスは、バルトスにもヒュンケルにも聞こえないように、ささやいた。
「・・・お疲れだな、バルトス様。」
「それはそうだろう。もう幹部もほとんど倒された。バルトス様が一手に魔王軍を背負われているのだからな。」
「・・・勇者が、近づいているみたいだな。」
「ああ・・・。最悪、この地底魔城に攻め込まれることもありうるだろうな・・・。」
「・・・ぼっちゃんのこと、どうするんだろうな・・・。」
「・・・ああ・・・。」
　だが、二頭の会話は、ヒュンケルの耳には入らなかった。

　ヒュンケルは、嬉しそうに、満面の笑みをたたえ、父に話しかけた。
「今日は早かったね。びっくりしたよ。」
　嬉しそうに、満面の笑みを浮かべる息子に、バルトスは、愛おし気にその小さな頭を撫でた。
「父さん、今日はどこに行ってきたの？」
　ヒュンケルの問いかけに、バルトスは頷くと、テーブルの上に地図を広げた。そして、ヒュンケルを呼んだ。
「こっちにおいで、ヒュンケル。」
　まだ５歳のヒュンケルは、椅子の上によじ登り、そこに立って、テーブルの上の地図を見つめた。
「地図、だね。」
「そうだ。今いるところがどこか、わかるか？」
「わかるよ。いつも父さんに教えてもらっているからね。ここだろう？」
　そう言って、小さな指で、ホルキア大陸の中央付近からやや南西

側の地点を指さした。
　バルトスは、満足げにうなずいた。
「よく覚えているな。そうだ、我らのいる地底魔城は、このあたりだ。」
　そうして、バルトスは、地図の上で、その骨の指を左に動かした。ホルキア大陸の左側の大陸を指さした。
「こっちがロモスだな。」
「うん。」
「わしらが今日、見てきたのは、ロモス側の港だ。」
　そう言って、バルトスは、ラインリバー大陸から、指先をホルキア大陸に戻し、ホルキア大陸の西の端を指さした。
　ヒュンケルは、地図に目を落としながら、バルトスに尋ねた。
「遠いね。こんな遠くまで行って、なんでもう帰ってこれたの？」
「それは、とっておきの秘密の道具を使ったからさ。」
　そう言って、バルトスは、わざと自慢げな、冗談めいた言い方をした。この日は、勇者の出方の様子見だったので、キメラの翼で、ロモス側に面した西の港町まで往復しただけだったのだが、そこまでは説明しなかった。
　だが、ヒュンケルは、感心したような顔をすると、また嬉しそうな顔をした。
「さすが、父さんだね。すごいや。」
　バルトスは、またヒュンケルの頭をなでると、愛おし気に目を細めた。
「さあ、もう、たたむぞ。」
「うん。」
　バルトスは地図を丸め、ヒュンケルは登っていた椅子からぴょんと飛び降りた。
　そうして、バルトスは、絨毯の敷かれた床に腰を下ろすと、今度は、ヒュンケルを膝に乗せた。
　最近、バルトスは、帰りが遅いどころか、いったん城から出ると、数日間は帰ってこないことが増えていた。ヒュンケルは不安だった。
　だが、今日は、バルトスは早く帰ってきてくれた。ということ

は、明日はどうだろう。
　ヒュンケルは、少し後ろを向いて、バルトスを仰ぎ見た。期待を込めて、父に尋ねた。
「父さん、明日は？明日はお休み？」
「いや、明日も出る。明日出たら・・・２～３日は帰れないだろうな。」
　期待に反した言葉に、ヒュンケルは口を尖らせた。
「えー、つまんないの。」
　バルトスは苦笑した。
「そう言うな。ほら、今日はお土産もあるぞ。」
「わあっ、ありがとう！」
　バルトスが、ヒュンケルに差し出したのは、１冊の絵本だった。
　表紙には、大きく星が描かれていたが、その星には顔が描かれていた。そして、何やらその星は、泣き出しそうに眉根を寄せていた。
　その星の絵の上に、絵本の題が記されていた。ヒュンケルは声に出して読んだ。
「いちばんぼしは、ひとりぼっち。」
　バルトスは、嬉しそうな声を出した。
「おお、よく読めたな。」
「だって、父さんが教えてくれたから。」
　父に褒められて、ヒュンケルは、嬉しそうに笑った。バルトスも笑みを浮かべた。
「どれ、わしが読んでやろうか。」
「うん。」
　バルトスは、ヒュンケルを膝に乗せたまま、絵本のページをめくっていった。
　最初のページには、表紙と同じ、泣き出しそうな顔の星が、大きく、一つだけ、描かれていた。
　バルトスは、ゆっくりと、丁寧に、絵本の文字を声にしていった。
「いちばんぼしは、ひとりぼっち。おひさまのしずんだ、よるのそらで、ひとりでかがやいている。」

バルトスがページをめくって、読み進めていくと、次第に、一番星の周囲に、星の姿が増えていった。それとともに、泣き出しそうな顔だった一番星の顔が、少しずつ、和らいでいった。
　絵本を読むバルトスの声が、低く、優しく響く。
「あおいほしさん、こんばんは。
　いちばんぼしは、ゆうきをだして、よびかけた。
　すると、よぞらにかがやきはじめたあおいほしが、にっこりとほほえんだ。
　いちばんぼしさん、こんばんは。
　いちばんぼしはうれしくなった。
　すると、こんどは、よぞらにあかいほしがかがやいた。
　いちばんぼしは、あかいほしにはなしかけた。
　あかいほしさん、こんばんは。
　あかいほしは、つよくかがやいて、いちばんぼしにこたえた。
　いちばんぼしさん、こんばんは。」
　最後のページには、笑顔の一番星の周囲に、無数の星が描かれていた。満天の星空だ。
「そらには、たくさんのほしがかがやいている。
　もう、いちばんぼしは、ひとりじゃない。
　たくさんのほしたちにかこまれて、きれいに、つよく、かがやいていた。」
　バルトスは、最後まで絵本を読むと、ヒュンケルに声をかけた。
「おしまい。
　面白かったか？」
「うん！」
　ヒュンケルは、力強くうなずいた。そして、背後のバルトスを見て、ねだった。
「ねえ、父さん、もう１回読んで。」
「仕方がないな。」
　バルトスは苦笑したが、ヒュンケルの求めどおり、もう一度最初から絵本を読んだ。そうして、３回は繰り返し絵本を読んだ。
　ようやく納得したのか、ヒュンケルはバルトスの膝から下りたが、絵本は手に持ったままだった。気に入ったようだった。

ヒュンケルは、絵本のページをめくりながら、つぶやいた。
「また星を見に行きたいな。
　ねえ、父さん、また連れて行ってくれる？」
　地底魔城は地下に作られた城だが、闘技場や閲兵広場など、空が見える箇所は複数あった。バルトスは少し考える様子を見せたが、ヒュンケルにうなずいた。
「そうだな・・・。今度のわしの休みのときにでも行くとするか。」
「やったー！父さん、ありがとう！」
　ヒュンケルは両手を上げて喜んだ。
　そんな息子を見て、バルトスは目を細めた。
「お前はいい子だなあ、ヒュンケル。そうやって、いつも礼を言ってくれるな。」
　そうしてバルトスは、まっすぐにヒュンケルを見つめて語った。
「お前は、オークにも、ギガンテスにも礼を言っていたな。大事なことだ。そうやって、いつも感謝の気持ちを示していれば、お前はたくさんの仲間に恵まれる。この星のようにな。」
「・・・仲間？」
「そうだ。」
　だが、ヒュンケルは、バルトスの言葉が腑に落ちていないかのように訝し気に眉をひそめた。
　バルトスは苦笑した。
「よくわからないか？お前が大きくなったときに、思い出してくれればいい。」
　ヒュンケルは、そう言われても、やはり腑に落ちてないかのような表情を変えなかった。
「・・・おれ、よくわかんないよ。父さんと、みんながいればそれでいい。
　オークも、ギガンテスも、仲間、なのかな？それなら、ちょっとわかるかも。」
「そうだな。」
　バルトスは、うなずいた。
　バルトスは、話題を変えて、ヒュンケルに尋ねた。

「もうすぐお前の６歳の誕生日だな。何か欲しいものはあるか？」
　すると、ヒュンケルは、おずおずと、おっかなびっくり、遠慮がちに言葉を紡いだ。
「あのね、ほしいもの、じゃなくて、してほしいことでもいいかな？」
　バルトスは、うなずいた。
「おお、いいぞ。言ってみろ。」
　ヒュンケルは、バルトスから答えを促されながらも、なかなか言葉にできずにいた。恥ずかしそうな、困ったような表情をしたまま、しばらく黙っていたが、やがて、やはり遠慮がちに、その希望を声にした。
「・・・父さんと、１日遊びたいんだ。」
　バルトスを見上げるヒュンケルの目が、切なそうな色を帯びている。子どもなりに、無理なことを言っているとわかっているのだ。ダメかな、と考えていることはすぐに分かった。
　バルトスは、少しの沈黙の後、ヒュンケルに頷いて見せた。
「・・・わかった。その日は、休みをもらうとしよう。」
「やった！約束だよ！！」
　ヒュンケルはバルトスに飛びついた。
　だが、ヒュンケルに見えない影で、バルトスは、苦い色をその面に浮かべていた。
　この頃、ヒュンケルにとっては、地底魔城がその世界のすべてだった。彼の世界の中心にいたのはバルトスだった。
　幼いヒュンケルは、その世界がこの先もずっと続いていくのだと信じていた。
　彼はまだ知らなかったのだ。
　魔王ハドラーの軍勢は、すでに崩壊を始めており、勇者の手が迫りつつあったということを。
　そして、ヒュンケルが６歳の誕生日を迎えた頃には、もはや、バルトスは、自室に戻る暇もなく、勇者を押しとどめるための軍勢を城外に派遣し、また自分も、勇者が攻めてきた時のために、兵を配置し、装備を備えるまでに追い詰められていた。
　ひとりぼっちの６歳の誕生日、ヒュンケルは、バルトスにもらっ

た一番星の絵本を繰り返し眺めていた。
　その絵本をどうやって手に入れたのか、バルトスは最後までヒュンケルに告げなかった。

　ヒュンケルは、朝から目が痛かった。
　遺跡の街の宿で目を覚ますと、目が痛くて腫れぼったくなっていた。おそらく、眠りながら泣いていたのだ。ここのところは、このようなことは減っていたので、ヒュンケル自身、驚いた。
　アバンには、ゆっくり休んでいた方がいいと言われ、バケルとともに、宿に残された。アバンはまた、あの遺跡を見に行くようだった。
　出がけに、アバンが、バケルに向かって、「ヒュンケルを頼みますね。」と言うと、バケルも「マカセロ。」などといっちょまえに言ってたことが腹立たしかった。間違っても、バケルに世話を焼かれるようなことはないはずだ。
　ヒュンケルは、宿にいても手持無沙汰だったので、散歩に出ることにした。
　行く当てもなく、喧騒が苦手な彼は、宿から町はずれに向かって歩いていた。
「ヒュン、ドウシタ？」
　バケルが周りを飛びながら、ときどき、ぺちぺちと彼の頭をたたくが、相手をする気にもならずに、ヒュンケルはバケルを手で振り払っていた。
　そのままそぞろに歩いていくと、ふと、井戸の傍らに立つ、老女が目に付いた。
　老女は、井戸に備え付けられた桶を地面に置き、その取っ手に縄を結ぼうとしているようだった。しかし、縄を持ち上げると、桶が不安定に傾いている。どうも、うまく縄が結べていないようだった。
　見ていて歯がゆくなったヒュンケルは、老女に声をかけた。
「おばあさん、どうかした？」
「ヨッ！」
　老女は、初対面の少年に声をかけられ、さらには、何やら不審な

オレンジ色のモンスターにまであいさつされ、驚いたようだった。
　ヒュンケルは、ぶっきらぼうに、だが、老女を安心させるように話しかけた。
「だいじょうぶだよ、おばあさん。コイツ、何もしないから。」
　そう言って、視線でバケルを示した。
「・・・水、汲みたいの？手伝おうか？」
　ヒュンケルの申し出に、老女は、まだ驚きながらであったが、ようやく返事をした。
「・・・あ・・・ありがとう・・・。」
　ヒュンケルが桶を見ると、縄が緩んでいて、うまく結べていなかった。これでは、桶が傾いて水がうまく汲めないし、悪くすれば、水の重みで桶が井戸の中に落ちてしまう。
「これじゃあ、水が汲めないよ。ちょっと待って。結びなおすから。」
　ヒュンケルは、ふと考えて、以前、オーザムの港町で習った縄の結び方を思い出した。漁師は、どうやっても解けない紐の結び方というものを何種類も知っていた。その中の、もっとも簡単な結び方なら、ヒュンケルも教えられて覚えていた。
　ヒュンケルは、桶の取っ手に縄を通し、一方の縄に、一方の縄を何回もくるくると巻き付け、今度はその隙間にもう一方の縄の端を通し、強く引いた。瞬く間に、縄にしっかりと桶が固定された。
　縄の一方は桶にくくりつけられ、もう一方は、井戸の上に渡された梁に結び付けられていた。ヒュンケルは、縄を強くひき、梁との間にゆるみがないことを確かめた。
「これで大丈夫だ。」
　そういうと、ヒュンケルは、桶を井戸の中に放り投げた。そして、梁につけられたハンドルを回し、桶を引っ張り上げた。見ると、桶の中は水で満たされていた。
　ヒュンケルは、桶の中の水を老女の水瓶の中にあけると、水瓶を満たした。いくつもの水瓶を水でいっぱいにして、それを老女の荷車に積んだ。
「家まで運ぶんだろう？手伝うよ。ほら、バケルも来い。」
　そう言って、なんとなく、ヒュンケルとバケルは、水瓶を老女の

家まで運ぶことになった。

　老女の自宅は、街はずれにあった。
　この街には、街を囲む外壁があり、それが、現在の街と、遺跡の一部を大きくぐるりと取り囲んでいた。
　老女の自宅は、その外壁の目の前にあり、家の裏手には、すぐに背の高い壁がそびえたっていた。
　ヒュンケルとバケルと、水を入れた水瓶を老女の家に運び込んだ。
　家の中はひっそりとしており、人気がなかった。独居であることはすぐに分かった。
「ありがとう。助かったよ。お茶があるから、あがっておいで。」
　老女は、リビングの椅子に二人を座らせると、お茶と、ビスコッティを出してくれた。固く焼かれて、甘みの少ないビスコッティは、お菓子というよりも保存食に近かった。
　ヒュンケルは、老女から、お茶の入ったカップとビスコッティの乗った皿を差し出されると、遠慮がちに礼を述べた。
「あ、ありがとう。」
　老女はそれを見て、穏やかに微笑んだ。
　バケルは遠慮なく、大きな口にビスコッティを放り込み、ぼりぼりと音を立ててかじっていた。
ヒュンケルは、両手でお茶のカップを持ったままリビングを見渡すと、老女に尋ねた。
「おばあさんは、ここに一人で住んでいるの？」
「そうだよ。」
　ふと、ヒュンケルは、窓際に置かれた小さな額が目に止まった。
　その中には、手紙のようなものが入れられており、その後ろには、若い男女が赤ん坊を抱く絵があった。
「・・・あの絵は？」
「娘夫婦と孫だよ。」
「一緒に住んでないの？」
「もうみんな、亡くなったからね。」
「・・・ごめん。」

思いがけなく辛い過去を話させてしまい、ヒュンケルは老女に詫びた。
　だが、老女は、穏やかに微笑んだまま、ヒュンケルに言葉を返した。
「いいんだよ。」
　老女は、ぽつりぽつりと昔話を語り始めた。
「もう５～６年になるかな。魔物の群れが町や村を襲い始めたころだった。まだこの街にもしっかりした外壁はなくて、よく魔物たちが町中に入り込んで、街の人を襲っていた。娘夫婦は、この街は危ないって言って、まだ小さかった孫と一緒に、もっと田舎の村に避難したんだ。私は、遠くまで歩けないから、ここに残った。
　疎開先の村に着いた娘は、手紙を寄こしてくれた。それがあの手紙さ。」
　老女は、娘たちの肖像と一緒に飾られている手紙を示した。
　ヒュンケルがその手紙を見ると、丁寧な筆跡で近況が記されていた。
「・・・無事着いたって、書いてあるね。」
　老女は、少しだけ驚いた顔でヒュンケルを見た。
「おや、ぼうやは読めるんだね。小さいのに、賢いね。」
　ヒュンケルは不思議そうな顔をして老女を見た。
「誰だって読めるでしょ。難しい字、使ってないし。」
「・・・私はね、読み書きができないんだ。」
　ヒュンケルは、驚いて老女を見つめた。老女は、困ったような、恥じるような複雑な表情を浮かべてた。
　ヒュンケルは、またしても老女に謝るしかなかった。
「・・・気を悪くさせたならごめん。」
「いやいや、気にしないでいいよ。」
　そしてまた、老女は、娘一家の話を始めた。
「娘たちはね、魔物に襲われないように避難したはずだったのに。皮肉なもんだね。娘たちの村が、今度は魔物に襲われた。その襲撃で、娘も、娘の夫も、孫も、みんな・・・亡くなってしまったよ。
　あの子たちは、何も遺さなかったから、娘たちを知っている人に、絵を描いてもらった。それがあれだよ。」

老女は、寂しそうな笑みを浮かべ、だがヒュンケルを見ると、愛おしそうな瞳で彼を見た。
「孫は女の子だったけど、生きていれば、ぼうやくらいになるかな。ぼうやくらいの子を見ると、どうしても思い出しちゃうね・・・。」
「・・・ごめんなさい。」
「ぼうやが謝ることじゃないよ。
　勇者様が魔王を倒してくださって、魔物の群れに襲われることはなくなった。いい時代になったね。」
　ヒュンケルは、老女の話を聞いて思った。
　この人は、自分と同じだ。
　あの戦いで、家族を失い、一人ぼっちになってしまった。
　自分は、勇者に、たった一人の父を奪われた。
　そしてこの人は、魔王の率いた魔物の群れに娘一家を奪われたのだ。
　立場は違えども、お互いに、敵対していた勢力のために家族を亡くしてしまったことに変わりはない。
　ヒュンケルは尋ねてみたくなった。この人も、自分と同じように、暗い思いを抱えているのだろうか。家族を奪った相手を憎んでいるのだろうか。
　ヒュンケルは、言葉を絞り出すようにして、老女に尋ねた。
「・・・おばあさん、憎くないの？魔王や魔物が。」
「ぼうや？」
　老女は、不思議そうな顔をして、ヒュンケルに視線を向けた。
　ヒュンケルは、すがるように老女に問いかけた。
「だって、魔王や魔物が攻めてこなかったら、おばあさんの娘も孫も死ななかったんじゃないか。おばあさんは、魔王や魔物のせいで、ひとりになっちゃったんじゃないの？だったら、魔王や魔物が憎いはずじゃないか。」
　ヒュンケルは、バケルを指さした。
「こいつだって、いやじゃないの？モンスターなんだよ？」
　ヒュンケルは本当に尋ねたかったことは言葉にできなかった。
―俺の父さんは、魔王軍の騎士だった。

俺だって、魔王軍の側にいたんだよ。
　俺が、憎くないの？
　ヒュンケルは、唇を噛んで、言葉を飲み込んだ。
　老女は、少しの間、ヒュンケルの眼差しを受け止めていたが、やがて、ぽつりとつぶやいた。
「・・・疲れちゃったんだよね・・・。」
　そのまま、老女は言葉をつづけた。
「いくら恨んでも、もう、娘たちは帰ってこないよ。娘たちを死なせた魔物がどんなものだったのかもわからない。
　そこにいる子が、私の娘たちを手にかけたわけでもない。
それよりも、私が、もっと早く、娘たちを呼び戻していれば、娘たちを助けられたんじゃないかって、そんなことばかり思ってしまうね。」
「え？」
「娘たちの村が襲われる前、娘たちの村の方角が危ないんじゃないかって噂があったんだ。村が、順番に襲われていってるってね。私は、娘たちに知らせたかった。でも、この年寄りの身体じゃ、娘たちの村まで行けない。私は字が書けないから手紙も書けない。どうしよう、どうしようと思っているうちに・・・最悪の知らせが来てしまった。
　今でも思うんだよ。
　あのとき、手紙が書けていれば、娘たちを助けられたんじゃないか。
　いや、もっと前、娘たちをいかせなければよかったんじゃないか。
　私がもう少し、娘たちに言えていれば、娘たちは今でも生きていられたんじゃないかってね・・・そんなことばっかり。」
　たまらず、ヒュンケルは声を上げた。
「おばあさんは悪くない。悪くないよ。」
　すると、老女は、嬉しそうに目を細めた。
「・・・ありがとう。ぼうやは優しいね。」
　老女は、対面に座ったヒュンケルに手を伸ばし、そっと、その髪を撫でた。

「いい子だね。大事に育ててもらっているんだね。
　ぼうやは、見ず知らずの私を助けてくれた。こうして、家まで、重い水瓶を運んでくれた。
　お菓子のお礼を言って、娘のことを聞いたら謝ってくれた。
　大事なことだよ。
　それをぼうやに教えてくれた人がいたんだね。」
　ヒュンケルは、恥ずかしくなって、視線を下げた。
　老女は、うつむいたヒュンケルの髪をそっと撫でながら、言葉をつづけた。
「ぼうやは、字も読める、難しい縄結びもできていたね。
　ぼうやが大きくなって、一人で生きていけるように、ちゃんと、いろいろなことを教えてもらっているんだね。」
　それは、いつか、別の村でも聞いたことと似た言葉だった。
「勇者様が魔王を倒してくださって、ぼうやみたいな優しい子が安心して生きていけるようになったんだね。
　私の娘にも孫にも間に合わなかったけれど、ぼうやが安全に大きくなっていける世の中になったのなら、それだけで、勇者様には感謝しないといけないね。」
「・・・そんなこと・・・。」
「オカワリ！」
　複雑な思いを抱えきれずにヒュンケルが言葉を返そうとしたとき、まったく会話に入ってこなかったバケルが突然、皿を両手で突き出した。
　見ると、皿の上にあったはずのビスコッティがなくなっている。
　ヒュンケルは呆れた。
「・・・お前、少しは遠慮しろよ。」
　ヒュンケルは、バケルを見据えた。
「だいいち、お前、ゴーストだろう？アンデッドだろう？普段は食事取らないくせに、お菓子は食べるってどういうことだよ。どこ入ってんだよ。」
「ココ―。」
　バケルは、堂々と自分の腹部を指さした。いったい、どんな構造になっているのだろうか。

老女は苦笑して、キッチンから新しいビスコッティを持ってきた。
「・・・なんかもう、こんな子だと、怒る気持ちもなくなっちゃうね。」
　そう言ってバケルの皿に、ビスコッティをのせてやった。
「こんなモンスターばっかりだったらいいのにね。」
　そう言って、老女は穏やかに微笑んだ。

　老女の家を辞した後、ヒュンケルは、宿とは反対側に向かって足を進めた。
　バケルがヒュンケルの周りと飛びながら、抗議している。
「ソッチ、チガウ！」
　ヒュンケルは、周りを飛び回るバケルを捕まえて羽交い絞めにした。
「いいから、お前も来い。」
　そのまま、バケルを小脇に抱え、ヒュンケルは足を進めた。
　バケルは訳も分からず、ヒュンケルに運ばれていくしかなかった。
　歩みを進めるヒュンケルの頭に、いくつもの言葉が交錯していた。
　先ほどの老女の言葉。
―大事に育ててもらっているんだね。
大事なことを、ぼうやに教えてくれた人がいたんだね。
　以前立ち寄ったロモスの村での、おかみさんの言葉。
―いい人に拾ってもらったねえ。文字が読めて、計算もできるって、大きいことなんだよ。
　ネイル村で見た、森の風景。
　野生動物だけではなく、モンスターたちも、等しく森に包まれていた。
　あの村での、別れ際のことば。
―あなたがまた来てくれるのを、マァムと待っているわ。
―また来るっていうなら、今度は俺が鍛えてやる。
　ヒュンケルに差し伸べられた、忘れられない、小さな手。

—にいに、だーいしゅき！
　涙とともに懸命に紡がれた、思いの丈のこもった言葉。
—まってる！ずっとまってる。
　いくつもの、何人もの言葉が、ヒュンケルの中に蘇ってくる。
　そして、アバン。
　アバンは、この２年の間、ヒュンケルに難しい文字を教えた。計算を教え、行く先々の村々で様々な仕事を自分と一緒に、ヒュンケルにさせた。
　アバンは、路銀のためだと言っていたがそうではない。その意味が、ヒュンケルにはわかっていた。
　アバンに地底魔城から連れ出された後、ずっとヒュンケルは感じていた。
　この地上は、自分の生きる場所ではない、と。
　だが。
　ヒュンケルは、次第に足を速めた。
　歩調が速くなり、走り始めた。
　懸命に走りぬき、街の外壁を超え、ようやく、目指すその場にたどり着いた。
　そこは、昨日、アバンとともに訪れた、小高い丘の上だった。
　かつて、この街を守ろうとした人間と魔族、モンスターが共に命を落とした場所。
　そこから北を見れば、太古にこの街を飲み込んだ霊峰がそびえたっていた。
　だが、南を振り返ると、そこには、神殿をはじめとする遺跡群、そして、その向こうに、現在の街が見える。
　さらに、西を見ると、街の向こうに、見渡す限りの小麦畑が広がっていた。
　秋の深まるこの時期、春播きの小麦は、収穫時期を迎える。
　そして小麦畑の南には、いくつもの葡萄棚が置かれていた。そこには、重そうな葡萄が下がっているのだろう。何やら作業をしている人の姿が見えた。
　小麦畑の奥に広がる牧草地帯には、小さく、点々と、家畜の姿も見える。

人の営みが、そこにはあった。
　その葡萄棚の上を、ついっと飛ぶ影が見えた。
「ア、ドラキー！」
　バケルが声を上げた。
　ヒュンケルは、丘から見える風景を目に映しながら、ぽつりとつぶやいた。
「・・・これが、先生が守った世界・・・。」
　かつて、ヒュンケルは、その風景の中に自分を置かなかった。
　父の死の上に成り立つ世界など、許せるはずがなかった。
　だが、父は、ヒュンケルがどう生きるのを望んでいたのだろうか。
　今となってはわからない。
　しかし、わずかに残る記憶の中から、ヒュンケルは懸命に父の思いを探ろうとした。
—お前はいい子だなあ、ヒュンケル。そうやって、いつも礼を言ってくれるな。
　大事なことだ。そうやって、いつも感謝の気持ちを示していれば、お前はたくさんの仲間に恵まれる。この星のようにな。
　父は、ヒュンケルにそう言って、微笑んだ。
　仲間とは、何を指していたのか。
　そして、読んでくれた「いちばんぼしの絵本」。そこに書かれていた文字は。
　アバンの言葉がよみがえる。
—あなたにこの文字を教えてくれた人がいたのですね。
　そう、「いちばんぼしの絵本」は、地上の文字で書かれていたのだ。
　バルトスは、あの日、偵察に出た際、あの絵本を、当時のハドラーの支配地域で買い求めたのだろう。だが、それをヒュンケルには告げなかった。
　バルトスはヒュンケルに地上の文字を教えた。
　地上の地図を見せていた。
　人への感謝を教えていた。
　ヒュンケルにも、その意味がつかめ始めていた。

ヒュンケルは、亡き父を思いながら、人の営みのあるこの風景を眺めていた。そのまま、身じろぎもせず、ただ、目の前の畑たちを見つめ続けていた。
　バケルは、ヒュンケルの腕からするりと抜け出していたが、そのオレンジ色のアンデッドモンスターは、黙って少年に寄り添った。そして、言葉もなく、その隣にただ浮いていた。

　それから、どれくらいの時間が経ったのだろうか。
　日が傾き始め、小麦畑の向こうの地平線に、茜色の太陽が沈もうとしていた。
　ヒュンケルは、自分の側に人の気配がしたことにも気づかず、無防備に佇んでいた。
　だから、声をかけられるまで気付かなかった。
「ヒュンケル。」
　耳に馴染む声が、彼を呼んだ。
　ヒュンケルは、ゆっくりと振り返った。
　いつもどおりの穏やかな笑みを浮かべて、アバンがそこに立っていた。
　アバンは、振り返ったヒュンケルを見ると、少し驚いた顔をしたが、すぐにいつもの笑顔に戻った。
「こんなところにいたんですね。そろそろ日が暮れますよ。戻りましょうか。」
「・・・はい・・・。」
　ヒュンケルの隣に浮いていたバケルは、アバンの元にふわりと飛んで行った。アバンは、バケルの頭を撫で、肩に止まらせると、ヒュンケルの横に並んだ。
「何を見ていたんですか？」
　すると、ヒュンケルは、ぽつりとつぶやいた。
「・・・きれいだなって、思って・・・。」
　アバンはうなずいた。
「ああ、夕陽がきれいですね。」
　しかし、師の言葉に、ヒュンケルはかぶりを振った。
「・・・いえ、それだけじゃなくて・・・。

畑も、家畜も、葡萄の棚もみんな・・・。
　・・・これが、先生が守った世界だったんですね・・・。」
　アバンは、驚いた顔でヒュンケルを見た。
　幼い彼の頬は、涙で濡れていた。
　まるで、自分が泣いていることに気付いていないかのように、ヒュンケルは、流れる涙をそのままにしていた。
　ヒュンケルは、アバンに語り掛けた。
「・・・先生。先生の言うとおり、俺に、地上の文字を教えてくれていた人がいました。」
　ヒュンケルは、アバンの前で初めてバルトスのことを語った。だが、その名前は、口にすることはできなかった。
　ヒュンケルは、アバンに尋ねた。
「その人は、俺が地上で生きることを望んでくれていると思いますか・・・？」
　アバンは、穏やかに微笑んだまま、力強くうなずいた。
「ええ。きっと。」
　ヒュンケルは、その暗灰色の瞳に、小麦畑を映したまま、アバンに応えた。
「・・・わかっています。
　・・・その人は、きっと、俺がどこで生きていっても困らないように、俺に地上の文字も教えてくれたんだと、思います・・・。」
　そして、ヒュンケルは、アバンを見上げた。
　アバンがこれまでに見たこともないような、幼く、心細そうな目をしていた。
　ヒュンケルは、アバンに尋ねた。
「この風景の中に、俺もいて、いいんですか？」
　アバンは、包み込むような柔らかな笑みを浮かべた。
　そして、もう一度、力強く、うなずいた。
「もちろんですよ。」
　ヒュンケルは、アバンを見上げたまま、照れたような笑みを浮かべた。
　アバンは、そのまま、ヒュンケルとともに夕陽に彩られた大地を見つめていた。茜色の太陽は、少しずつ、地平線へと消えて行っ

た。
　宵闇の足音が聞こえてきて、空が藍色に変わろうとしていた。
　アバンは、その太陽が消えた西の大地を指さした。いつの間にか、その面から、笑顔が消えていた。
「ヒュンケル、あっちの方向に７日くらい行きますと・・・地底魔城があります。」
　その言葉に、ヒュンケルは身を震わせた。
　地底魔城。
　ヒュンケルの生まれ育った故郷。
　だが、同時に、その城は父の墓標でもあった。
　アバンは、いたわるような色をその声に帯びさせて、言葉をつづけた。
「無理をする必要はありません。怖いと思うのなら、嫌だと思うのならやめましょう。
　でも、もし、あなたが、訪れたいと思うのであれば・・・。私も一緒に行きたい。そう思います。」
　ヒュンケルは、じっとアバンを見上げた。そして、はっきりとした口調で、アバンに言葉を返した。
「行きます。連れて行ってください。」
　アバンは、少し驚いた顔で、ヒュンケルを見た。だがすぐに、柔和な笑みを浮かべて、大きく、ゆっくりとうなずいた。
「ええ、行きましょう。一緒に。」
　アバンは、ヒュンケルの傍らに浮かんでいたバケルに声をかけた。
「バケルも、行きましょう。私たちと一緒に来てください。」
　バケルは、訳も分からず、首をかしげていたが、アバンはいつものように、とんがり帽子からはみ出た、バケルの頭を撫でていた。

　宿のベッドでバケルと並んで眠るヒュンケルを、アバンは、穏やかに見つめていた。
　もう大丈夫だ。
　アバンは、安堵した。
　もうこの子は、この地上でも生きていける。

アバンは、地底魔城で相まみえた、ヒュンケルの父の姿を思い浮かべた。
—バルトスさん、ありがとうございます。
　ヒュンケルの背中を最後に押してくれたのは、やはり彼の父だった。
—あなたがヒュンケルに望んだこと、ヒュンケルは、もう感じて、わかっています。
　あなたが大事に育ててくださったおかげです。
　アバンは、心の中の騎士に、深く頭を下げた。

　白いローブの男は、屹立したまま、天井付近に設置された月のような画面を注視していた。
　そこには、地上から送られてくる映像が順次、映し出されていた。
　男の横には、演台のような背の高い机が置かれており、その上には、地上の世界地図が乗せられていた。　そして、その台の前には、漆黒の、影のモンスターが揺らめいていた。
　白いローブの男は、月の面に映し出された映像をつぶさに観察しながら、時折、傍らに置かれた地図に視線を落としていた。
　台の上に置かれた世界地図には、いくつもの書き込みがなされてた。
　世界地図のあちこちに点が書かれ、その横には日付が記載されていた。点から点へ、矢印が書かれている箇所もある。
　男は、画面を見上げながらその地図と見比べると、時折、地図の一点を指さし、なにやら、無言の指示を影のモンスターに下していた。傍らの影のモンスターは、言葉もない指示でありながら、主の意図は理解できる様子であり、そのたびに、地図に何か記載を増やしていった。
　すると、男の背後に、笛の音が響いた。それと同時に、高い足音が響く。
　白いローブの男はちらりと背後に視線をやったが、それも一瞬のこと、すぐに画面に意識を戻した。
　白いローブの背後に現れたのは、対照的に、漆黒の装いの男だっ

た。仮面をつけ、道化師のような装束に身を包んでいるが、その身にまとう色は闇であった。その男の周囲を、一つ目ピエロが宙を舞いながら、漂っていた。
　男は、横笛を吹きながら現れた。そうして、唇から横笛を離すと、その身を包む色や雰囲気に不似合いな明るい声で、白いローブの男に語り掛けた。
「やあ、ミスト。きみも真面目だねえ。また勇者を監視しているのかい？いくら大魔王様のご指示とはいえ、よくやるねえ。」
　すると、白いローブの男ではなく、傍らの影のモンスターが苦言を呈した。
「キルバーン様、お言葉が過ぎますぞ。」
　死神キルバーンは、大げさに肩をすくめた。
「おおこわ。ミスト、きみの部下に怒られちゃったよ。」
「べーっ！」
　キルバーンの肩の上に浮いていた、一つ目ピエロのピロロが、影のモンスター、シャドウに向かって、大きく舌を突き出し、悪態をついた。
　すると、白いローブの男、ミストバーンを取り巻く空気が、一段とひんやりとしたものになった。何も言葉を発せずとも、ミストバーンが不快に思っていることは、すぐに、キルバーンにも理解できた。
　キルバーンはため息を吐いた。
「やだなあ、ミスト。根詰めちゃってさ。遊び心も大事だよ。」
　すると、それまで沈黙を保っていたミストバーンが重い口を開いた。
「・・・用がないなら帰れ。」
　キルバーンは、肩をすくめた。
「冷たいなあ。僕はたまにはきみとおしゃべりしたいって思っているのに。」
　ミストバーンを取り巻く空気が、一層温度を下げた。慌ててキルバーンはとりなした。
「おっと、用件もちゃんとあるんだよ。
　きみが知りたいことさ。」

その言葉に、ミストバーンのローブの奥の目が光ったのを、キルバーンは見逃さなかった。
　キルバーンは、ミストバーンの上に備え付けられた、月のような画面を見上げた。
　そこには、荒野で野宿をするパーティの姿が映し出されていた。いや、パーティというにはアンバランスすぎる。空色の髪をした、巻き毛の若い男と、銀髪の幼い少年、それにオレンジ色のアンデッドモンスター。色彩さえもばらばらな３人組が、焚火を囲んでいる様子が鮮明に描かれていた。
　キルバーンは、ミストバーンに語り掛けた。
「きみが気にしていただろう？勇者が連れているあの少年は何なんだって。
　ちゃんと調べてきたよ。
　そうしたら、びっくりだ。」
　キルバーンは、そこでいったん言葉を区切った。そして、仮面の奥の目に意味ありげな色を浮かべた。
　キルバーンは、ミストバーンに人差し指を突き出した。
「なんと、あの子は、魔王ハドラー麾下、地獄の騎士バルトスの息子だ。
　なんでそんな子が、親の仇も同然の勇者と一緒にいるんだかねえ。」
　キルバーンは、呆れたような声を出した。そのまま言葉をつづける。
「あの子は、種族は人間だけど、ずっと地底魔城で育ったようだね。こっち側、僕たちの側の存在だよ。地上にも勇者にも不釣り合いだよね。
　・・・ねえ、ミスト、あの子、もらっちゃったら？」
　その言葉に、ミストバーンを取り巻く空気の温度が変わったことを、キルバーンは感じ取った。